

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	モーパッサン、伝記の諸問題
Author(s)	足立, 和彦
Citation	フランス文学 , 34 : 47 - 60
Issue Date	2023-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054188
Right	
Relation	



モーパッサン、伝記の諸問題¹

足立 和彦

ギイ・ド・モーパッサン（1850-1893年）の人生は43年と長くはないが、これまでに少なくない数の伝記が書かれてきた。1906年のエドゥアール・メイニヤル²を嚆矢とし、ポール・モラン³やアルマン・ラヌー⁴といった作家の手になるものを経て、2003年にはナディーヌ・サティアによる大部の作品⁵が発表されている。これらの伝記によって作家の生涯は徐々に明らかにされてきたが、しかしそれらには誤謬が含まれていたことが、2012年刊行のマルロ・ジョンストンの労作によって明らかになった⁶。

本稿の筆者は2023年、アンリ・トロワイヤによる伝記（1989年）の翻訳を刊行したが⁷、やはり今日では誤りと判明した箇所が存在するため、それについては訳注で指摘するという苦肉の策を講じている。それはともかく、では、なぜ誤った記述が長らく存続したのだろうか。モーパッサンの正確な伝記を書くのが困難だった理由はどこにあったのか。本論では、まずトロワイヤの伝記における誤りを取り上げ、過誤の出所を確認する。そのうえで「正確な伝記」を書くために必要な条件を検討しよう。最後に、改めて作家の伝記を読むことの意義を考えてみたい。

I. トロワイヤ『モーパッサン伝』に見られる誤り

アンリ・トロワイヤ（1911-2007年）はロシア出身の小説家。1935年のデビュー以後、長くにわたって小説を書き続ける一方、多数の伝記も執筆した。『モーパッサン伝』発表時には78歳、伝記は当時参照可能だった資料に基づいており、独自の調査がなされているわけではない。したがってトロワイヤの記述に見られる誤りは、すべて他に源泉があると考えられる。本論では、そのなかで最も重要と思われる3点を取り上げる。

¹ 本稿は2022年12月10日に開催された、日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会での講演に基づいている。

² Édouard Maynial, *La Vie et l'œuvre de Guy de Maupassant*, Paris, Mercure de France, 1906.

³ Paul Morand, *Vie de Guy de Maupassant*, Paris, Flammarion, 1942 (Paris, Pygmalion / Gérard Watelet, 1998).

⁴ Armand Lanoux, *Maupassant le Bel-Ami*, Paris, Fayard, 1967 (Paris, Bernard Grasset, coll. « Les Cahiers Rouges », 1979).

⁵ Nadine Satiat, *Maupassant*, Paris, Flammarion, coll. « Grandes Biographies », 2003.

⁶ Marlo Johnston, *Guy de Maupassant*, Paris, Fayard, 2012.

⁷ Henri Troyat, *Maupassant*, Paris, Flammarion, coll. « Grandes Biographies », 1989. アンリ・トロワイヤ『モーパッサン伝』、足立和彦訳、水声社、2023年。

I-1. 北アフリカ旅行

『モーパッサン伝』第13章には次の記述がある。

彼は肩をすくめ、もう一度荷物を鞆に詰め直した。目的地はマルセイユだ。1887年10月3日に従僕と一緒に着くと、ノアイユ・ホテルに宿泊し、売りに出されている船「ザンガラ」号を見にゆき、暑く騒がしい通りを散策した。そして翌日にはアルジェリアに向けて船に乗った⁸。

続く第14章には、「〔1889年〕9月の初め、そこ〔サンタ・マルグリータ〕からチュニスへ渡った⁹」とあり、イタリア旅行の途中で北アフリカへ赴いたと書かれている。以上のような記述に従うと、モーパッサンは1887、88、89、90年と、4年にわたって毎年北アフリカへ出かけたことになる。確かに、彼が南国を愛したのはよく知られた事実であり、旅行記『放浪生活』（1890年）に記事がまとめられていることもあって、このような記述にも違和感はない。だが果たして、モーパッサンはそれほど頻繁に地中海を渡ったのだろうか。

「モーパッサンの北アフリカ旅行については誰もが知っていると思込んでいる。だが実際にそれは何回あったのか？¹⁰」マルロ・ジョンストンはこのように問いかけ、書簡の調査によって事実を明らかにしたのだった。実のところは、旅行は都合3回、1881年、88年冬、90年秋に行われたのだという。

ではなぜ、トロワイヤのような誤解が生じたのだろうか。第一の原因は、従僕フランソワ・タッサールにあったと考えられる。1883年からモーパッサンに仕えたタッサールは、作家の死後、1911年に回想録を発表する。『ギイ・ド・モーパッサンについての思い出』は編年体で書かれているが、その1887年の箇所には以下の記述が見られる。「マルセイユ、10月3日。主人はノアイユ・ホテルでいつもの部屋に宿泊。部屋はカヌビエール通りに面している。(略)翌朝、我が主人に、売りに出されている艀装を解かれたヨットを見に旧港に連れて行かれた。(略)航海はとても良好、うねりもなく、素晴らしい天候。我々はアルジェに着く。まっ白で、円形劇場のような様子をしている¹¹。」トロワイヤがこの記述に従っていることは疑いない。この

⁸ Henri Troyat, *Maupassant*, éd. cit., p. 176. 以下、翻訳は本論の著者による。

⁹ *Ibid.*, p. 206.

¹⁰ Marlo Johnston, « Les Dates du deuxième voyage de Maupassant en Afrique du nord (6 nov. 1888-16. janv. 1889), d'après sa correspondance », *Maupassant 2000, Bulletin Flaubert-Maupassant*, n°9, 2001, p. 243.

¹¹ François Tassart, *Souvenirs sur Guy de Maupassant*, Paris, Plon, 1911, p. 96. なお「ザンガラ」号購入は89年1月であり、この点でも正確さを欠いている。一方、89年秋の箇所にはイタリア周遊の記述があるが、チュニジアへの言及はない。プレイヤッド版『中短編集』の年表にはかつて「9月、チュニスにて精神病院を訪れる」の記述があり（2013年の版では削除）、トロワイヤはこれに拠ったものと思われるが、プレイヤッド版の記述の由来は未詳。Guy de Maupassant, *Contes et nouvelles*, Gallimard, coll.

タッサールの記録は正しいものと考えられたため、北アフリカで書かれたモーパッサンの（日付不明の）書簡についての年月の特定も、この記述に基づいてなされたようだ。こうして、モーパッサンは87年秋にアルジェリアを訪れたと考えられるようになったのである。

もっとも、回数が何回であったにせよ、作家が北アフリカの地を熱愛したことに変わりはなく、その限りにおいて、このような誤認が作品の解釈に影響を及ぼすことはなかっただろう。その意味では、被害は小さかったと言えるかもしれない。

I-2. ジョゼフィーヌ・リッツェルマンと3人の子どもたち

1887年7月29日（略）ヴァンセンヌのミディ通り25番地に住む若い女性、ジョゼフィーヌ・リッツェルマンが娘マルグリットを産した。彼女にはすでに2人の子どもがおり、息子リュシアンは1883年に、長女リュシエンヌは1884年に生まれていた。3人とも父親は不明だった。少なくとも公式にはそうであったが、母親の周囲では、彼らは作家モーパッサンの私生児だと噂されていた。（略）だが彼は常にこの関係を秘密にしておき、子どもたちを認知しようとは決して思わなかった。彼らの母親と結婚するというに関しては、恐怖と共にその考えを拒絶し続けた。結婚に対する絶えざる敵意、母性に対する生理的嫌悪、最後に、このような釣り合わない関係はロールを怒らせるという確信、そうしたことのすべてが、望まない家族から彼を遠ざけたのだった¹²。

ジョゼフィーヌ・リッツェルマン（1855-1920年）の3人の子の父親はモーパッサンだという説が最初に公にされたのは、1901年3月17日付 *Cris de Paris* に載った無署名の記事（ただしこれ自体、別の記事の再録の可能性はある）だったようだ。当時はこのゴシップに反響はなかったが、1926年9月3日付 *La Liberté* が再び取り上げると、それを受けて9月22日付 *L'Œuvre* が3人の子どもへインタビューを行った。子どもたちはモーパッサンが父親だと知って（考えて）いたが、生前の母親から口止めされたために黙っていたのだと語っている。1967年、アルマン・ラヌーは改めて独自に探索を行い、「調査の現段階において、モーパッサンが3人の父親だった可能性は大きい¹³」と記した。こうした情報がトロワイヤの記述の基になっていると見られる。

しかし、作家の生涯について綿密な調査を行ったジョンストンは、モーパッサン

« Bibliothèque de la Pléiade », t. II, 1979 (édition de 1996), p. XX.

¹² Henri Troyat, *Maupassant*, éd. cit., p. 174-175.

¹³ Armand Lanoux, *Maupassant le Bel-Ami*, Paris, Bernard Grasset, coll. « Les Cahiers Rouges », 1979, p. 253.

が父親だった可能性は低いと結論づけている。子どもたちが父親はモーパッサンだと考えていたことは事実だとしても、実際には別人だったのではないかというのだ。「つまり父親が誰であるかについて誤解があったように思われる。それは、何も知らされずにいた3人の子どもにあっては驚くべきことではない。私生児、養子、その他の子どもであっても、自分の出自に関するロマネスクな考えを作り出すということはよくあるだろう¹⁴。」確かなのは、モーパッサンの側にはジョゼフィーヌと関係があったという証拠が一切存在しないということである。

長らく私生児の存在が信じられていたことが、モーパッサン研究にもたらした影響は少なくないと思われる。それというのも、彼の作品には「私生児」のテーマが繰り返して登場するが、それが作家の生涯と結びつけて考えられてきたからだ。特に重要なのは、権威あるプレイヤッド版『中短編集』において（少なくとも2013年の版まで）言及されてきたことである。たとえば1882年4月19日発表の「息子」の注釈で、編者ルイ・フォレストイエは次のように記している。「恐らく、彼はまたごく私的な感情に捕われていたということもありえよう。1883年2月27日、作家がジョゼフィーヌ・リッツェルマンとの間に作った3人のうちの最初の子どもが生まれる。彼は決して子どもたちを認知しようとしなかったが、十分な愛情を示し、彼らの生活費を気にかけていたのだった¹⁵。」ここには、作者自身の実体験が作品の源泉にあるという、いささか素朴な見方が読み取れる。

長らく私生児の存在が信じられてきたのには、それなりの理由があっただろう。モーパッサンが性的に放縦だったのは事実であり、それについてはエドモン・ド・ゴンクールらの証言が存在している。したがってギィに私生児がいたとしても驚くには当たらず、リュシアンらが実子であるという説も容易に受け入れられたのだろう。また、次の点にも留意したい。すなわち、モーパッサンが我が子を認知せずとも可愛がり、陰で養育費を払っていたという「事実」は、結婚制度を自然に反するものとして嘲笑し、(トロワイヤも言及するように)母性に対する嫌悪を表明してはばからなかったこの作家にも、いわば常識的感性(父性)があったことを示す証拠となりえたのである。すなわち、ジョゼフィーヌと彼女の子どもたちにまつわる逸話は、モーパッサンを小市民的道德内に留めておきたいという、研究者の願望に沿うものだったのではないだろうか。

証拠が不在である以上、関係がなかったと断言することは難しいが、ジョンストンの詳細な伝記を見るにつけ、モーパッサンが彼女の住むヴァンセンヌに通ってい

¹⁴ Marlo Johnston, *Guy de Maupassant*, éd. cit., « Annexe A. Les enfants Litzelmann », p. 1115.

¹⁵ Note de Louis Forestier pour « Un fils » (1882), dans *Contes et nouvelles*, éd. cit., t. I, 1974 (édition de 2013), p. 1424.

たという可能性は低いものと思われる。今後、ジョゼフィーヌについての言及は避けるのが賢明だろう。

I-3. X夫人、偽の回想録

3点目も女性に関わるものである。伝記第11章に以下の記述が見られる。

さらに、彼〔モーパッサン〕は次第に頻繁に奇妙な人格分裂に襲われ、自分自身を他人のように感じていた。「一度ならず、彼は言葉の途中で止まり、目は虚空を凝視し、額にしわを寄せてまるで秘密の音を聞いているようだった」と、フランソワ・タッサールは書いている。「その状態は数秒しか続かなかつたが、彼は言葉を取り戻すともっと小さな声で話し、単語と単語の間に注意して間を空けるのだった。」¹⁶

これは、モーパッサン自身の狂気や幻覚体験を示す証拠とされてきた証言だが、実はここでトロワイヤは二重の間違いを犯している。まず、この発言はタッサールの回想録には見られない。実際は、1912年10月25日付『グランド・ルヴュ』に掲載された「愛しいギイ・ド・モーパッサン（女友だちの記録）」と題する手記の言葉である（これはトロワイヤのミスだと思われるが、あるいは意図的な改変なのかもしれない）。Xと署名する匿名の著者は、「彼が私の人生を満たした。彼は私のヒーローであり神だった。彼は常にそうであり続けたのだ¹⁷」と告白し、交際のなかで知り得た作家の肖像を描いている。この手記は好評だったのか、1913年3月25日、4月10日付の同誌に続編が掲載されている。

この手記のなかでX夫人は、「1885年頃、身体および精神が十分に健康だった時においてさえ、ギイ・ド・モーパッサンが奇妙な幻覚を見ていたことを人は知っているだろうか？」と切り出し、トロワイヤの引用箇所続けて、「そうしたことは何年にもわたって、私たちが二人きりでいる時にかなり頻繁に起こったのだ¹⁸」とまとめている。

この回想録は研究者によって本物と認定されたうえ、著者はエルミーヌ・ルコント・ド・ニューイだと考えられてきた。ところが、この手記は実は偽物だったのである（それがトロワイヤのもう一つの誤りだ）。この点については、ジャック・ビャンブニュの行った調査が詳しい。それによると、偽作者はルーマニア出身のアドリア

¹⁶ Henri Troyat, *Maupassant*, éd. cit., p. 144.

¹⁷ X..., « Guy de Maupassant intime (Notes d'une amie) », *La Grande Revue*, 25 octobre 1912, p. 673.

¹⁸ *Ibid.*, p. 684.

ン・ル・コルボー（1886-1932年）という作家だった¹⁹。この人物は、出世を目指してパリに出てきた際、いわば文体修業として贋作に手を染めたのだという。

X夫人の手記は長くにわたって専門家からも本物と見なされてきたが、なかでも有名なのは、そこに「引用」された1887年12月19日付チュニス発という書簡であり（トロワイヤも引いている²⁰）、これは作家の書簡集にも収録されている。

昨晩からずっと、私は狂おしくあなたのことを思っています。あなたに再会したい、ここで、目の前ですぐにもあなたを目にしたいという常軌を逸した欲望に、突然、私の心は捕われたのです。海を越え、山を越え、町を通り過ぎて、ただただあなたの肩に手を置き、あなたの髪の毛の香りを嗅ぎたいのです。

あなたの周囲に、この欲望が這い回るのを感じませんか？ この欲望、私から発し、あなたを探し求めるこの欲望、夜の沈黙のなかであなたに懇願する欲望をです²¹。

こんにち存在が知られている作家の書簡のなかに、このような熱烈な愛の告白は存在しないと言っていい。モーパッサンが身分ある女性と深い関係にあったという「発見」は、決して些細な事柄ではなく、作家像に少なからぬ影響を与えてきたと思われる²²。

では、なぜこの回想録は本物と信じられてきたのだろうか。理由の一端は、エルミーヌという、実際にモーパッサンと親しくしていた女性が存在したことにある²³。また一方、回想録に描かれる作家の姿が本物らしかったということもあるだろう。ル・コルボーはモーパッサンの小説やタッサールの記録を基にこの「回想録」を作成したのだから当然なのだが²⁴、モーパッサンをよく知る者にとってこそ一層本当らしく見えたのだ。「そもそもX夫人のテキストは、我々がすでに知っていることの他は何も教えてくれない。だが逆説的にも、恐らくはだからこそ人はそれを信じたのだ。それというのもこの回想は、あらゆる証言によって形成された小説家のイメ

¹⁹ Jacques Bienvenu, « Le Canular de Le Corbeau », dans Sandrine de Montmort, *Un autre Maupassant*, Paris, Scali, 2007, p. 348.

²⁰ Henri Troyat, *Maupassant*, éd. cit., p. 178.

²¹ Lettre à Hermine Lecomte du Noüy (?), 19 décembre 1887, dans Guy de Maupassant, *Correspondance (Corr.)*, éd. Jacques Suffel, Évreux, Le Cercle des bibliophiles, t. II, 1973, p. 269.

²² ビヤングニュは論考のなかで、プレイヤッド版に X 夫人の手記が頻繁に引用されていることを批判していた。その後、2013年の版では引用はすべて削除されている。

²³ エルミーヌはモーパッサンの死後に彼をモデルにした小説『恋のような友情』(*Amitié amoureuse*, Paris, Calmann Lévy, 1896) を発表し、作家と親しい間柄にあったことをほのめかしていた。

²⁴ 先の書簡が1887年12月にチュニスで書かれたとなっているのは、ル・コルボーもタッサールの記述に従って、モーパッサンが87年冬に北アフリカを旅行していたと考えたからに他ならない。過去の連鎖が認められる。

ージに見事に対応していたのである²⁵」と、ビヤンヴニュは指摘している。信憑性が高いために専門家を騙すことに成功したのであれば、これは偽作者ル・コルボーの「勝利」と言うよりないだろう。

II. 正確な伝記を作るための条件

以上、トロワイヤの記述に見られる誤りを確認してきた。かように従来の伝記には問題があったわけだが、そもそも、どうして誤った情報の混入を防げなかったのだろうか。もしかすると、正確な伝記の制作を困難にした、より根本的な理由に目を向ける必要があるのかもしれない。

そのことを検討するために、ここから、正確な伝記を作るのに望ましい条件とはどのようなものなのかを考えてみよう。

II-1. 著者の意向

最初に挙げられるのは、著者自身の姿勢や意向である。たとえばギュスターヴ・フロベールであれば、大抵の時はクロワッセの自宅で執筆に明け暮れていたし、遺された膨大な書簡によって日々の行動を辿り直すことができる。その意味で、伝記向きの作家と呼べるかもしれない。かたやモーパッサンの場合、とりわけ成功を収めた後は頻繁に旅行し、一つところに定住することがなかった。そのためか残された書簡の数も多くなく、しかも日付が書かれていない手紙が散見する。

とりわけ重要なのは、作家が自らのプライベートを秘匿したいと考えていた点である。ある書簡の一節に次の言葉が見られる。「私の書くものはすべて公衆や批評家のものであり、議論や好奇心に身をさらしています。ですが私の人生や人格に関わるすべての事柄は、一切暴露されたいことを望んでいるのです²⁶。」この書簡の宛名や日付が不確かなままという事実はいかにも象徴的だ。私生活を知られたくないという思いは師フロベール譲りのものだが、モーパッサンの場合、それが年を追うごとに強固な執念となっていった。本人が隠そうと努めていたのであれば、後から生涯を再構成するのが難しいのも当然と言うべきだろう。

II-2. 家族、身内の協力

著者が非協力的な場合、次に頼れるのは親しい者の援助だ。だがこの点でも、モーパッサンは望ましくない状況にあった。ギィの死後、遺族は財産を分配するために早々に彼の所持品を売却してしまうのである。アルマン・ラヌーは次のように説

²⁵ Jacques Biennu, *op. cit.*, p. 356-357.

²⁶ Lettre à un destinataire non identifié, [fin 1889], dans *Corr.*, t. III, p. 122.

明している。

死後、彼の父母は何も残さない。彼らはギエット荘を売り、ベラミ号を売り、ボッカドール通りのアパルトマンにあったものを売り払う！（略）ロールは精神的かつ身体的に、ギィが分解されることを望んでいた。だがまた他の事柄も認めざるをえない。彼の悲劇に関する一切のものについての一種の耐え難い恐怖が彼女を捕えていたのだった²⁷。

ギィの死後、母ロールはインタビューに答えたり、未発表の原稿を公表したりするなどの貢献をしているが、一方で、息子のイメージを綺麗に保つことを優先したふしがある。召使いのタッサールも彼女の意向を汲んでいたようで、回想録執筆の際に一種の自己検閲を行っていた。そうした事情が重なった結果、とりわけ女性関係について曖昧な点が残されたのである。それゆえに、ジョゼフィーヌやX夫人などの不確かな情報が介入する余地があったと言えよう。

II-3. 後世・研究者の良心

実際に伝記を作成するのは後世の者であり、愛好家や研究者による実証的な調査・研究が欠かせない。ところがモーパッサンの場合、この点でも事態はうまく運ばなかった。20世紀前半、アカデミックな研究者がまだ少ないなか、山師的な人物が不確かな言説を流布させたのである。再びラヌーの言葉を引こう。

ジゼル・デストック、ピヤール・ダルカイ、イギリス人フランク・ハリス、ピエール・ボレルや他の者たちは、きわめて重要な書類を気ままに偽造したり損なったりし、代替不可能な貴重な資料を散逸させた。「敬虔な手」がベラミの「破廉恥な行為」の痕跡を消し去ろうと努める一方で、やくざ者が不正に儲けていたのである。この人生、そして死後においては一切が影の方向へと働いたのであるが、それはモーパッサンが望んだことだった²⁸。

ジゼル・デストックはモーパッサンと恋愛関係にあった女性（本名マリー＝ポール・パラン＝デバル、1845-1894年）。彼女の手記とされる『愛の手帖』をダルカイがボレルに売り、それをボレルが出版するのだが²⁹、ボレルの記述が曖昧だったり誤っていたりしたため、結果としてジゼルの手記の信憑性にも疑問符が付くこと

²⁷ Armand Lanoux, *Maupassant le Bel-Ami*, éd. cit., p. 418-419.

²⁸ *Ibid.*, p. 420.

²⁹ Pierre Borel, *Maupassant et l'androgynie*, Paris, Les Éditions du livre moderne, 1944.

になった³⁰。ボレルは他にも未刊行書類を出版しているが、おしなべて研究者の信頼を得られなかったのである。フランク・ハリスは回想録のなかでモーパッサンの性生活を暴露しているが、これもどこまで信じてよいのか分からない代物だ³¹。このように真偽の不確かな証言もまた、正確な伝記の妨げになってきたのである³²。

つまりモーパッサンの場合、著者、身内、後世といういずれの条件も伝記には不向きだったと言えよう。もっともラヌーの言葉にあるように、それが著者の望んだことならば、すべては必然的な成り行きだったのかもしれない。そう考えると、ラヌーやトロワイヤのように作家の人生を暴こうとする後世の「裏切り者」に対し、あたかもモーパッサンが一矢を報いたかのようでもある。

III. モーパッサンの伝記を読むこと——「脂肪の塊」を例に

ここまで、従来の伝記の抱えていた問題点を概観してきた。もっとも、ここで取り上げた誤謬は研究者によって改められたわけだが、そこで今一度問題となるのは、伝記に求められるのは「正確さ」だけなのかということだ。確かにジョンストンの浩瀚な伝記は、作家に関する事実を可能な限り収集し、その情報量において決定的なものとなっている。だがそれでも、だからといってこれ以降、モーパッサンの伝記を書くことが不可能になったのかといえば、そうではないだろう。同様に、ジョンストン以前に書かれた伝記が無用になったわけでもない。その理由は、伝記が必ずしも情報の集積としてあるだけでなく、それ自体一つの「物語」として受容されるものだからだ。情報の選択、そして著者による解釈によって、伝記もそれぞれに個性を持つはずである。

一方で、「作家の伝記」特有の問題を考慮する必要もあるだろう。すなわち作家の生涯と、彼が生み出す作品との関係である。芸術創造の秘密に伝記はどこまで迫ることができるのか。そのことを考えるために、以下では伝記を「読む」ことの意義を問い直してみたい。その際、例としてモーパッサンの出世作「脂肪の塊」を取り上げよう。それというのも出世作に到る道のは、個性や独創性とはどういうものかについて多くの示唆を与えてくれるものだからである。

「脂肪の塊」は、1880年春、ゾラと彼の下に集う青年たちによる共作短編集『メ

³⁰ デストックについては以下を参照。Gilles Picq, « G[isèle] d'Estoc, reflets d'une mal[e]passante », *Genre, récits et usages de la transgression*, dir. Nicole Cadène, Karine Lambert et Martine Lapiéd, Aix-en-Provence, Presses Universitaires de Provence, 2020, p. 175-185.

³¹ Frank Harris, *Ma vie et mes amours*, tr. Madeleine Vernon et H. D. Davray, Paris, Gallimard, 1960.

³² ラヌーはデストックの証言を疑う一方、X夫人（＝エルミーヌ・ルコント・ド・ニューイ）の回想は本物と判断し、またリッツェルマンの私生児も認めていた。この判断をプレイヤッド版編者フォレストィエも踏襲し、そのことがこれらの説を長らく普及させることにあずかっていたと考えられる。

ダンの夕べ』に発表された。普仏戦争のさなか、娼婦〈脂肪の塊〉が貴族やブルジョアのエゴイズムの犠牲となる物語である。

III-1. 戦争の体験

「脂肪の塊」と著者との関係を考える際にまず挙げるべきなのは、モーパッサン自身が普仏戦争を経験したという事実である。1870年にちょうど20歳だったギィに徴兵を逃れる道はなかった。従軍後、所属していたルーアンの部隊は、プロイセン軍の侵攻を受けてル・アーヴルへ潰走する。その直後に書かれた書簡が残されている。「僕は敗走する軍と一緒に逃げ出しました。危うく捕まるところでした。(略)60キロ歩きました。指令のために一晩中歩いたり走ったりした後、凍えるほど寒い地下室で石の上に眠りました。健脚でなかったら捕まっていたでしょう³³。」この時、モーパッサンが一兵士として戦争の苛酷な「現実」を体験したことは間違いない。「彼は恥辱、愚かさ、残酷さに溢れたイメージを記憶に留めるだろう³⁴」と、トロワイヤは記している。以後、モーパッサンは一貫して反戦の立場を取り続けることになる。

戦時中に彼が実際に何を見たのかについて詳しいことは分かっていないが、数少ない証言の一つとして次の一節を挙げることができる。

我々はそれを見た。戦争をである。人間が野獣へと戻り、狂乱し、快楽から、恐怖から、虚勢から、見せびらかしから殺すのを目にしたのだ。もはや権利が存在せず、法が死に絶え、正義という観念が一切消え果てた時に、我々が目撃したのは、道先で出会った無実の人々が、彼らが怯えていたからというので疑わしいと判断され、銃殺された姿である³⁵。

戦争という非常時に、人がいわば本性を露にする。それを20歳のモーパッサンは目の当たりにしたのだった。「脂肪の塊」執筆時、師であるフロバールに宛てた書簡に次の一節がある。「それは反愛国的なのではなく、ただ単に本当なのです。ルーアンの人々について私が言うことは、まだ真実に遠く及びません³⁶。」戦時に人々が見せる「真実」の姿を自分は見たのだという確信が、短い言葉のうちに込められているよう。

「脂肪の塊」の題材について、モーパッサンは親戚から話を聞いたか、あるいは新聞記事から着想を得たと考えられている。その限りで、作品は作者の実体験を直

³³ *Lettre à sa mère*, 1870, dans *Corr.*, t. I, p. 19. 強調は手紙の著者による（以下も同じ）。

³⁴ Henri Troyat, *Maupassant*, éd. cit., p. 34-35.

³⁵ « La Guerre » (1883), dans Guy de Maupassant, *Chroniques*, éd. Gérard Delaisement, Paris, Rive droite, 2003, t. I, p. 750.

³⁶ *Lettre à Gustave Flaubert*, 5 janvier 1880, dans *Corr.*, t. I, p. 253.

接に反映したものではない。だが上記のような背景を知ったうえで作品を読むなら、私欲を満たすために娼婦を犠牲にするブルジョアの浅ましい姿を描く時、そこにモーパッサンが個人的な思いを込めていたことは想像に難くない。物語の終盤、ようやく出発した馬車のなかで、〈脂肪の塊〉は隣人たちから見捨てられたことを悟る。

誰も彼女を見ておらず、彼女のことを思ってもいなかった。彼女はこれら誠実なる悪党たちの軽蔑に溺れるのを感じていた。彼らはまず彼女を犠牲にし、それから不潔で無用なものであるかのように投げ捨てたのだ³⁷。

「誠実なる悪党」« *gredins honnêtes* » という言葉の裏には、作者の確信、幻滅、そして恨みの感情があった。この語句のうちに、作家の根本的な人間観が凝縮して表現されていると言えるだろう。

確かに、伝記的な知識は必ずしも作品の解釈に影響するわけではなく、作品を理解するために不可欠ということもないだろう。だがそれでも、このような作者と作品との結びつきの強さを知ることは、テキストの言葉にいわば「厚み」をもたらしてくれるように思われる。読者が、作品を執筆する著者の内的経験を幾らか体験することが可能になるのである。

III-2. 自然主義を巡るパラドックス

「脂肪の塊」は、一般的には「自然主義」の作品と見なされている。実際、『メダンの夕べ』はゾラの弟子筋の青年らによるマニフェストという役割を担っていた。また、欲望やエゴイズムといった人間性のネガティブな面に焦点を当てる作家の姿勢には、ゾラとの共通点を見て取れよう。

だが、伝記を一読すると、「モーパッサンは自然主義者だった」と簡単には言えないことに気づかされる。その理由の第一は、まずもって彼がフロベールの弟子であったことにある。たとえば「脂肪の塊」の1年前、弟子は師に宛てて次のように綴っている。

ゾラについてどうおっしゃいますか？ 私は、完全にどうかしていると思います。彼のユゴーについての記事を読まれましたか？ 現代詩人たちについての記事や、『共和国と文学』という小冊子はどうでしょう。「共和国は自然主義的なものとなるだろう、さもなくば存在しないだろう」、「私は学者でしかない」！！（それだけとは！ なんとという謙遜でしょう。）」「社会調査」、人間的資料。一連の様式です。そのうちに本の背表紙に「自然主義様式による偉大な小説」と書

³⁷ « Boule de suif » (1880), dans *Contes et nouvelles*, éd. cit., t. I, p. 119.

かれることでしょう。私は学者でしかない!!!!!! それはものすごい!!!!!! そして誰も笑わないのです³⁸。

«pyramidal» はフロベールの口癖だったことに鑑みれば、ここでモーパッサンは、いわばゾラをだしに師弟の親密な関係を再確認していると言えよう。フロベールの教えを受けて育ったモーパッサンには、ゾラの見せる教条主義的な姿勢は受け入れられなかったのである。「彼は自然主義に、小説家のインスピレーションに押しつけられる融通の利かない、つまりは危険な制約を認めた³⁹」と、トロワイヤは論じている。そもそもフロベールは弟子に対して、何よりオリジナルであることの重要性を説いていた。「小説論」(1888年)にはそんな師の言葉が引かれている。

「もし独創性があるなら」と彼は言った。「何よりもそれを引き出さなければならない。もしそれが無いなら、どうしても一つ獲得する必要がある」⁴⁰

より重要なのは、1870年代のモーパッサンが、実際に自然主義と距離を取ろうと努力していたことである。この時期、ギイは自ら詩人をもって任じていたが、フロベールの弟子でありながら詩を書き続けるという姿勢には、ゾラやゴンクール(それにフロベールその人)と差異化を図ろうという意図が透けて見える。そんな彼は、戯曲に挑戦する際にもその態度を変えていない。「目下、私は自然主義演劇についてのゾラの考えに反して、歴史劇を作っています。それも際どいのを!⁴¹」こうして構想されたのが『リュヌ伯爵夫人の裏切り』(後に『レチュヌ伯爵夫人』に改稿)である。「際どい」点で自然主義と共通する面を持ちながらも、あえてロマン派以来の王道の韻文歴史劇に挑戦するところに、モーパッサンのしたたかな計算が窺える。伝統のなかに革新性を持ちこむという戦略のうちに、彼は自分の「独創性」を追い求めていたのである。

同様に、本領である詩作においても、古典主義的伝統への目配せが見て取れる。1880年に発表された長篇詩「田舎のヴィーナス」の冒頭を見てみよう。

神々は永遠である。古代イタリアに生まれたのと
同じように、我々の間にも生まれてくる

³⁸ Lettre à Flaubert, 24 avril 1879, dans *Corr.*, t. I, p. 218.

³⁹ Henri Troyat, *Maupassant*, éd. cit., p. 77-78.

⁴⁰ « Le Roman » (1888), dans Guy de Maupassant, *Romans*, éd. Louis Forestier, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la pléiade », 1987, p. 713.

⁴¹ Lettre à Flaubert, 17 novembre 1876, dans *Corr.*, t. I, p. 101.

だがもはや跪いていた時代に留まっていはしない
 そして、彼らが亡くなるや、人々はすぐに忘れ去る。
 いつでも生まれてくるだろうし、最後の者が
 不信心な群集をそれでもなお支配するだろう
 すべて英雄はヘラクレスの種からなる。
 古き土地は今なおヴィーナスを産み出すのだ⁴²。

「脂肪の塊」と同時期に、モーパッサンはこのような（時代錯誤と見えかねない）詩を書いていたのである。「田舎のヴィーナス」の性愛を率直な言葉で歌うことによって、ここでも自然主義的側面と伝統的側面の折衷が試みられている。モーパッサンは新しい時代を意識しながらも、自然主義とは別の場所に独自の位置を得ようと苦心していたのだ。この点、ゾラの下に集った他のメダニスト、セアール、エニック、アレクシ、ユイスマンスとの立ち位置の相違は明確だろう。

そのような人物が、戦時における赤裸々な人間の姿を描くという自然主義的な計画に参加したのには、美学的理念とは別の、より功利的な動機があった。先に引いた書簡のなかで、「彼〔ゾラ〕の名前のお蔭で本が売れて、我々一人ずつ100か200フランを得られるという利点があります⁴³」と告げられているように、宣伝、収入という現実的欲求を前に、モーパッサンはそれまで拒んできた自然主義と妥協したのである。

ところが、その時に初めて彼の才能は真に開花したのだった。自然主義から距離を取ろうとしていた時には芽が出なかったモーパッサンが、自然主義と括られても構わないと開き直った時に、初めて真の成功を収めることができた。そこに、自然主義を巡るパラドックスが存在していると言えよう。つまりモーパッサンはこの時、「自然主義であるかどうか」と「オリジナルであるかどうか」とは同じではないということ、実体験を通して理解したのである。

そのような発見があったからこそ、「脂肪の塊」の評判を目にした彼は、即座に詩を捨てて小説家へ転身する決意をしたのだろう。そしてその決断の先に、華々しい栄光が彼を待っていたのである。「小説論」のなかで、モーパッサンはフロバールより前に師事したルイ・ブイエの教を思い返している。

ブイエは（略）百行の詩句があれば、恐らくはそれ以下であっても、もしもそれが非の打ちど

⁴² « Vénus rustique » (1880), dans Guy de Maupassant, *Des vers et autres poèmes*, éd. Emmanuel Vincent, Rouen, Publications de l'Université de Rouen, 2001, p. 99.

⁴³ Lettre à Flaubert, 5 janvier 1880, dans *Corr.*, t. I, p. 253.

ころなく、たとえ二流であってもその人物の才能と独創性との本質を含んでいるならば、一人の芸術家の名声には十分である、という教えを繰り返すことによって、私に次のことを理解させてくれた。すなわち、継続的な労働と仕事に対する深い理解が、明晰かつ力に溢れ、鍛練を経たある日に、精神の傾向全体によく調和した主題との幸運な出会いによって、短くても、唯一無二で、能うる限り完璧な作品の開花をもたらしてくれるだろう、ということ⁴⁴。

ブイエが語ったのは詩についてだが、師の教えを反芻するモーパッサンの頭にあったのは、間違いなく「脂肪の塊」だったはずだ。継続的な鍛練の後、自分にふさわしい主題との出会いがあれば、短くても完璧な作品を生み出すことができる——、ここには、才能とはどういうものかを巡る教訓に富んだ「物語」が存在している。そしてその物語は、作者の人生と作品とを絡み合わせたところに生まれるものであり、その物語を紡ぐのは、伝記と作品とを重ねて読む読者なのだ。

結語——読者が紡ぐ物語

伝記の最後に、アルマン・ラヌーはモーパッサンに向かって告げていた。「あなたの人生は、あなたの小説のなかで最も情熱的なものです⁴⁵。」確かにこの言葉には一理ある。伝記も一つの物語であり、我々は小説のように伝記を読み、そこに意義や教訓を汲み取るだろう。加えて、長い修業時代、華々しい成功、病による失墜からなるモーパッサンの生涯は、起承転結を備えた小説的な面を備えてもいる。

だがそうだとすると、作家の伝記は、彼が生んだ作品との関りを含んだ時にこそ真に豊かな物語となるのではないか。そしてその物語は、芸術創造の内実を垣間見せてくれるものとなるだろう。作品の意味を一律に作家に求める（サント＝ブーヴ的な）還元的な読みではなく、作家の生涯と作品とを縫い合わせて紡がれる物語の創造に、伝記を読むことの広い可能性が秘められている。

作家の伝記とはそれ自体で完結する作品ではなく、読者の主体的な参加に向けて開かれたテキストなのである。

⁴⁴ « Le Roman », dans *Romans*, éd. cit., p. 712.

⁴⁵ Armand Lanoux, *Maupassant le Bel-Ami*, éd. cit., p. 423.